様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２８ 年　 ６ 月 １４ 日現在

機関番号：１１４０１
研究種目：研究活動スタート支援
研究期間：2014～2015
課題番号：２６８８４００７

研究課題名（和文）談話参加者が共同注意を確立するプロセスから見る日本語指示詞の意味と機能

研究課題名（英文）The meaning and functions of Japanese Demonstratives: From the process of establishing joint attention

研究代表者
平田　未季（HIRATA, MIKI）

秋田大学・国際交流センター・助教

研究者番号：５０７３４９１９

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　1,700,000円

研究成果の概要（和文）：　本研究は、従来の日本語指示詞研究の成果をMax Planck心理言語学研究所認知人類学研究グループが中心となって構築した認知類型論的な枠組みで再分析し、彼らが導入した注意概念を用いて各形式の意味機能を記述した。
　本研究の意義は以下の3点である。(i)上述の研究者達が提示した自然談話データの詳細な分析という研究手法を用い、発話時の聞き手の注意の状態が指示形式の選択に決定的な影響を与えていることを明らかにした、(ii)他言語の指示詞の最新の研究成果と日本語指示詞の対照研究を可能にした、(iii)注意概念を用いることで、認知科学・脳科学など他分野の知見を取り入れた学際的な指示詞研究を可能にした。

研究成果の概要（英文）：This research re-analyzed the result of the descriptive studies of Japanese demonstratives in the cognitive typological framework, which is mainly constructed by researchers from Max Planck Institute (MPI) for Psycholinguistics. It describes the semantics of Japanese demonstrative forms using the concept of 'attention'.
There are three significant points in this research. (i) This study showed that the status of the addressee's attention at the speech time has a crucial effect on the choice of demonstrative forms by using the Natural Discourse Data method, which was also used by MPI for Psycholinguistics. (ii) This research made it possible to do a contrastive study between the previous outcomes of Japanese demonstratives and the most recent findings on demonstratives in other languages. (iii) By using the concept of 'attention', it may be possible to do an interdisciplinary study of demonstratives, which take into account of knowledge obtained from cognitive science or neuroscience.

研究分野：言語学

キーワード：認知言語学　共同注意　直示　空間認知　指示詞

１．研究開始当初の背景

本研究の分析対象である指示詞は、(i)言語普遍的な存在である、(ii)他の言語表現にその起源が求められないほど古くから存在する、(iii)子どもが最も早く習得する語の１つである、(iv)常にジェスチャーと共起するといった特徴を持つことから、人間の言語の最も原始的な機能を示すとされている（Diessel 2006 等）。故に、その意味機能の分析は、言語を用いた人間の伝達行動の本質の解明につながることが予測される。

しかし、従来の国語学・日本語学における日本語指示詞研究には以下の２つの問題点があった。

(1) 小説・新聞などの書かれた資料に基づくテキスト分析、もしくは作例に基づく分析が中心であり、指示詞が用いられる発話場面の要因が十分に考慮されていない。
(2) それぞれの研究が個別の概念を用いて日本語指示詞の記述を行っているため、研究間のつながりが見えにくい。結果として、最新の研究成果が海外の通言語的な指示詞研究に引用されていない。

２．研究の目的

本研究は、豊かな記述的研究の歴史を持つ国語学・日本語学における指示詞研究の成果を、Max Planck 心理言語学研究所の研究者らが提示した通言語的な枠組みを用いて再分析することで、以下の２点を達成することを目的とした。

(1) これまでの日本語指示詞研究の成果を通言語的な概念を用いて再分析し、他の言語の最新の指示詞研究の成果と比較可能な形で提示する。
(2) 国語学・日本語学において数多くの研究が行われてきた日本語指示詞研究の成果を通言語的な枠組みに位置づけることで、枠組みの理論的発展に寄与する。

３．研究の方法

本研究では、空間認知と言語の関係を調査する Max Planck 心理言語学研究所の space group が、世界的な規模のフィールドワーク成果に基づき、2000 年前後から発表し始めた指示詞分析の手法を日本語指示詞の分析に導入した。彼らの分析手法の特徴は主に以下の３点である。

(1) 「文脈の中で人間の認知行動を調査する」という信念のもと、フィールドワークにより様々な言語の自然談話データを収集し、それを分析対象とする。
(2) 人間の伝達行動を総体として捉え、指示詞などの言語的情報のみならず、指示詞を含む発話がなされた場面の非言語的な文脈情報をも分析に取り入れる。
(3) 共同注意（joint attention）、注意などの認知心理学や認知科学的な概念を指示詞分析に用いる。

彼らの枠組みは指示詞分析を学際的に発展させた。その研究成果の応用は、脳科学など（Stevens and Zhang 2012 等）、多分野に広がっている。

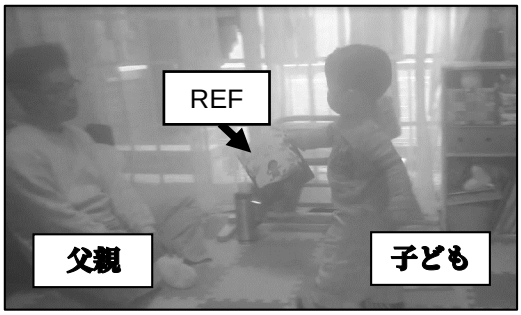
しかし、space group の指示詞分析はフィールドワークに基づくため、テキスト内の言語的対象を指す指示詞の非直示用法に関する考察は少なく、今後の課題とされている。

４．研究成果

本研究の成果は以下の通りである。

(1)日本語自然談話データの収集

成人、幼児を含む日本語母語話者同士の自発的な相互行為場面をビデオ録画し、それを書き起こした文字化データを集めた。また、談話分析を専門とする研究者および会話分析を専門とする研究者とともにデータセッションを複数回行った。



データ１ 父親と子どもの遊び場面(50 分)

データ２ 観光ガイドによる町案内場面
(50 分×4 回)

データ３ 展望台での大学生の会話場面
(60 分×2 回)

(2)自然談話データにおける指示詞の分布傾向の解明

自発的な会話場面では、対話参加者は、互い

の注意の状態をモニターしつつ、指示詞を含む言語表現やジェスチャー、身体動作などを用いて相手の注意の焦点を意図する対象に向けて誘導し、特定の対象に共同注意を確立させようとする。従来の日本語指示詞研究は、単文レベルの作例、もしくはテキスト分析が中心であったが、本研究では、Max Planck 心理言語学研究所の space group の研究手法、特に Enfield (2009) が Lao 語指示詞分析の際に用いた手法を導入し、談話レベルの分析を行った。その結果、話し手は一連の会話の中で、複数の指示表現を用いて同一の対象を指示していることが明らかになった。またその選択には以下の 3 つの傾向が見られた。

(i) 直示素性（コ系・ソ系・ア系）の分布傾向：共同注意確立過程の冒頭、聞き手の注意が話者もしくは対象に向けられていない場合はア系が用いられるが、注意の調整段階ではソ系が、共同注意確立後はコ系が主に用いられる。

(ii) 質的素性（-レ、-コ、-チラなど）の分布傾向：図 1 の通り、共同注意確立過程の冒頭、注意の転換の段階では場所を指す代名詞が、調整の段階では指示決定詞や指示副詞が、共同注意確立後は指示代名詞が主に用いられる

(iii) 直示素性と共起する質的素性の偏り：以上の結果、ソ系は指示決定詞の形で最も用いられやすく、コ系は指示代名詞の形で最も用いられやすいなど、各直示素性と共起しやすい質的素性の傾向が明らかになった。

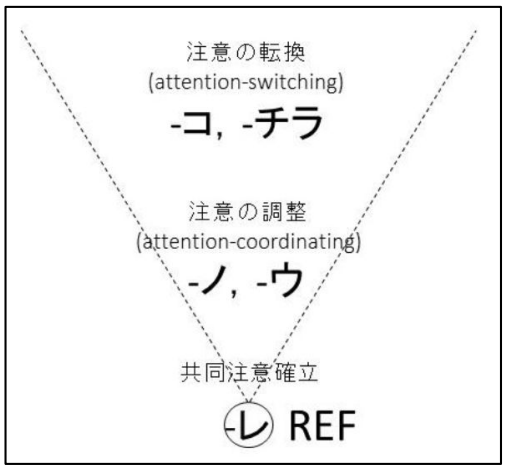


図 1 共同注意確立過程における聞き手の注意の状態と質的素性の分布傾向

(3)注意概念を用いた意味分析

以上のデータ分析結果をもとに、Max Planck 心理言語学研究所の space group が指示詞の意味記述のための新たな概念として提示した「注意」、「聞き手の注意」(Addressee’s attention)という概念を用いて、日本語指示詞の各系列の意味を再分析した。その結果、以下のことが明らかになった。

(i) 共同注意確立課程の冒頭に出現しやすいア系は「遠」という強い空間情報を持つ。

(ii) 共同注意確立後に指示代名詞の形で出現することが多いコ系は、空間情報を持たない「無標の指示形式」と極めて似た機能を果たしている（例：Lao 語の nii4 等）。

(iii) 共同注意確立課程の後半、注意調整の段階で、指示決定詞の形で現れることが多いソ系は、聞き手の注意の状態に関する意味をコード化する指示形式と極めて似た分布を示す（例：トルコ語の şu、Jahai 語の ton 等）。

(4)照応用法との連続性

以上の、注意概念を用いた指示詞分析を、指示詞のテキスト内用法の分析に拡大し、テキスト内において、日本語のソ系とトルコ語の şu が対照的な分布を示すことを提示した。この成果は、Max Planck 心理言語学研究所の space group が提示した指示詞分析の枠組みが、指示詞のテキスト内照応用法の分析にも拡張可能であることを示している。

以上の通り、自然談話データを用いた分析手法と注意という通言語的な概念を日本語指示詞の分析に導入することで、他言語の指示詞と日本語指示詞の特性を比較することが可能になった。また、日本語指示詞の具体的な分析を通して、指示詞の第一義的な機能は空間定位ではなく、聞き手の注意を調整するという伝達的な機能であるという space group の理論的な主張を裏付ける経験的証拠を提供することができた。さらに、テキスト内用法の分析を提示することで、彼らの枠組みが発話場面からテキスト内に拡張可能であることを示した。

以上を本研究の成果として提示する。

＜引用文献＞

① Diessel, Holger. 2006. Demonstrative, joint attention, and the emergence of grammar. *Cognitive Linguistics* 17 (4), 463-489.

５．主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計４件）

① 平田　未季、コ系の意味の再分析：指示詞体系における新たな最小の意味的対立、国立国語研究所論集、査読有、10 号、2016、19－39.
DOI：info:doi/10.15084/00000807

② 平田　未季、なぜ『中距離指示』のソ系

は『そこ』という形式で用いられることが多いのか：共同注意の確立と話し手による指示形式の選択、日本認知言語学会論文集、査読無、15 巻、2015、480－492

③ 平田　未季、注意概念を用いたソ系の直示用法と非直示用法の統一的分析、言語研究、査読有、146 号、2014、83－108 http://www.ls-japan.org/modules/documents/LSJpapers/journals/146_hirata.pdf

④ 平田　未季、指示詞習得におけるコ系の優位性：注意喚起語としてのコ系と尺度推意、日本認知言語学会論文集、査読無、14 巻、2014、409－420

〔学会発表〕（計３件）

① 平田　未季、山本　真理、共同注意確立活動におけるア系の有標性：会話分析の手法を用いた指示詞分析の一例、日本認知言語学会第16回大会、2015年9月12日～2015年6月13日、同志社大学（京都府・京都市）

② 平田　未季、共同注意の確立過程における聞き手の負荷と話し手による指示詞の質的素性の選択、日本言語学会第150回大会、2015年6月20日～2015年6月21日、大東文化大学（東京都・板橋区）

③ 平田　未季、なぜ『中距離指示』のソ系は『そこ』という形式で用いられることが多いのか：共同注意の確立と話し手による指示形式の選択、日本認知言語学会第15回記念大会、2014年9月20日～2014年9月21日、慶應義塾大学（東京都・港区）

〔図書〕（計 0 件）

〔産業財産権〕

○出願状況（計 0 件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

○取得状況（計 0 件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕

ホームページ等：なし

６．研究組織

(1)研究代表者

平田　未季（HIRATA, Miki）
秋田大学・国際交流センター・助教
研究者番号：50734919